季刊 ひゃくさい

百歳 百才 百菜 百祭 百催 百彩 百材 百哉

あいち年金者大学・文化誌

＊小特集＝私のおすすめのひとつ　斎藤孝／今枝正昭／清水悦子／倉元孝幸／伊藤義夫/浅野武彦 ＊評伝 平井利恵 ＊掌編小説 石原まこと ＊エッセイ 細田愛子／谷尚典／見上馨／大家信義／小林政治 ＊論考 竹中倭夫 ＊詩 うえきえいこ ＊詩への誘い 浅井薫 ＊俳句・川柳 赤旗文化セミナー句会／さざんか句会／港支部／加藤貞 ＊旅・講座・作品展など 祖父江儀男／鬼頭康男・藪野豊 ＊写真による孫自慢 今西翔平くん、祐翔くん、叶翔くん

第３９号
2012年10月

●論考●

医療危機を考える

竹中倭夫

がんばれ！ 梅村さん

いま「ともにあゆむ裁判」と、梅村紅美子さんは南医療生協（以下「南生協」と略）労災損害賠償請求訴訟を名古屋地裁へ提訴し、支援する会が同地裁へ公正な裁判を求める署名と、南生協に対して労災を認め労働安全衛生対策の改善を求める署名活動を展開しています。

民主医療機関として出発した南生協で、どうしてこんなことが起るのか、信じられない……と不思議に思う人がいるかも知れません。

梅村さんは昭和62年4月弱いものの立場に立つ医療に誇りを感じて、大学卒業と同時に南医療生協に事務として就職、以後その実践に努めて平成12年主任に昇格、その三ヵ月後事務長室課長となり、その時から始まった南生協総合病院のリニューアル工事の実施設計の担当となりましたが、この時一緒に新任してきた事務長は一ヵ月で「うつ病」に罹ってしまって頼る人もなく、過労で入院した梅村さんは病室から会議に出る日々が続きました。その年の10月には梅村さんも「うつ病」を発症しましたが、異動は認められなかった上、平成14年に「健康の自己管理が悪い」と降格させられました。

平成15年には「地域医療連携室」を一人で始める任務を課せられ、過大な目標達成を強いられ、その二年後再び体調が悪化、異動を希望したのに認められず「うつ病」が重症化しました。

平成18年1月診療所のケアマネとして異動、傷病手当を貰いながら「体ならし」に自主的に職場へ出る「リハビリ勤務」中に、退職する人から「ケアマネ管理者」の引継ぎをし、その過密勤務と過度のストレスのため、主治医による三ヵ月要休業の診断書を出したのに無視され、自分で「このままでは職場で死ぬ」と思って四ヵ月後休みに入りました。

そして平成20年4月休職期間満了で意に反する「自然退職」となりました。労災申請した名古屋南監督署が翌年1月不支給決定をしたので審査請求をし、平成22年7

月南生協を提訴したその年11月愛知労働基準局が「うつ病」を労災認定しました。南生協病院が労災治療とその治療費の労災給付を受けているのに、南生協本部はいまだに梅村さんの労災を否認し続けています。

業務上の病気と基準局が認めている梅村さんを「自然退職」としているのは、労基法一九条解雇制限違反であり、労災患者として職に戻さねばなりません。

ところが「梅村さんは夫の給料が安いので、生活の足しにするため裁判をしている」などの逆宣伝が南生協組合員の中に流されているとは、とんでもないことです。

この梅村問題は、今の日本の医療の深刻な事態の代表例です。このように虐げられても泣き寝入りしてしまう人が多い中、自ら立ち上がって問題点を明らかにして、医療に携わる人たちの健康と命を守ることは、進みつつある医療崩壊を食い止める重要な闘いなのです。

南生協の変質

この問題の直接原因は一言で言えば幹部の経営主義にあります。無差別・平等の医療を実践することをモットーに現在も活動しつづける民医連は「差額ベッド代徴収に反対」の方針を貫いていますが、南生協は全国の民医連の中で唯一差額ベッド代徴収を決定。これは医療の本質に関わる象徴的事柄で次の二つが対立します。

①お金のあるなしに拘らず誰でもまともな医療を受けられること②お金のある人がお金を出して快適な環境で進んだ医療を受けること。

①は民医連の立場で、②は多くの識者が主張する受益者負担主義で健保の医療費削減に利用しています。

南生協の大高新病院を初めて見た時、私は「これは稼ぎまくらんといかんナ」と直感しました。音楽ライブや文化活動に提供する施設などを造り、維持管理してゆく財政的余裕は、まともな医療からはつくれません。

人件費ゼロの診療報酬

昨年12月民主党政権の事業仕分けに医療を取り上げた際、政府側から「病院勤務医は忙しく働いているのに、それほど忙しくない開業医に比べ収入が少ない。勤務医に厚くする人件費を重視して診療報酬を改正すべき」と言ったのに対し、厚労省の担当官が「今の診療報酬はそうなっていない」と口ごもりながら答えていた。そのやりとりはうやむやになってしまったが、要するに政府委員には「診療報酬には当然人件費はあるもの」と思い込

んでいるのです。
昨年1月小林美希著『看護崩壊（病院から看護師が消えてゆく）』㈱アスキー・メディアワークス刊）は、「看護師配置による保健点数がつかないことで、苦境に立たされている代表格は手術室だ。経営側が『点数の付かない手術室の増員はできない』と言い放つことは少なくない」と述べています。

点数のない部署は病院中至る所にある。診療報酬の点数は、医師その他の技術料と若干の管理料で、直接医療行為ではない労働にはゼロである。例えば事務長以下の事務職員の人件費の原資はどこにもない。受付業務にさえゼロである。初診料や再診料は、医師の名目だけの診断技術料でそれに投薬料や種々の検査料と処置料が加わるのだが、直接医療行為でない労務には点数はゼロで、事務、掃除、炊事、電気系統の管理（要資格者）、守衛、運転手などへの点数は全くゼロである。従ってこれらの人件費は医療行為の点数から捻り出さねばならない。

例えば、工作機で指先がちぎれたケガ人の場合、六時間以内なら、完全な外科的無菌化処置と指先再建術を行えば抗生剤は不要で、一週間後まで通院も必要なく、指先を元に近い形にしてその手全体の働きを保持できるのに、この手術では直接携わる医師や看護師の人件費はおろか、ガーゼなどの材料費へ消えるので、手間のかかる外科的無菌化処置はせず、指先を短くする指切断術（この方が手術料が少しいい）となり、細菌に対する抗生剤投与（点数がある）と毎日の再診料にガーゼ交換処置料で補うが、それでも点数のない職場の人たちの人件費までは到底無理である。それ故、給食、掃除、レセプト（診療報酬請求書）作成などは外注する所が増えているが、それは病院経理にとって若干の人件費削減になるだけである。

結局、点数のある医療行為を増やす、点数の高い検査や高額医療器械をフル回転してゆかざるを得ないのだ。その結果、医療人のなかに過労死や「うつ病」が増えてきて、多くの医療機関は疲弊する医療者によって支えられているのだ。

診療報酬はどこへ

医療機器の生産額は右肩上がりの増加を続け、二兆五千億円を超えるが、これは病院の収入つまり診療報酬から出てゆくので、これが半分に減れば毎年一～

二兆円という医療費の自然増と言われる大半がなくなる。
慶応大学近藤誠講師によれば、一九九三年日本のＣＴは八千台。これは全世界の三分の一以上で、設置台数は十年で十倍近くその後も増え続け、最近のＣＴ装置（多列検出器ＣＴ）が急増しているという。
また放射線検査による年平均の被曝線量は日本人一人あたり約三・八ミリシーベルトと先進国平均の二倍。日本はＣＴ機器の保有台数も先進国の中で突出している。
世を挙げて先進医学への妄想を煽って、一見豪華な設備で患者を集めＣＴなどを撮りまくって収益を上げる病院が黒字になる仕組で、それは健康保険医療の診療報酬（医療従業員の人件費はゼロ）というパイプを通して、産業資本へ吸い取られてゆく。
この仕組をそのままでは、例え消費税を上げてその一兆六千億円を政府が言うように本当に医療へ廻しても、医療と周辺産業資本へ貢ぐだけである。

中間層の二分化

今、世界的に中間層の二分化が進み、格差社会への反撥が大規模なデモとなっている。日本でも中間層の富裕と貧困への分離が顕在化し、本当の富裕層でもないのにプチセレブ意識層に、先進高額医療機器崇拝志向をあおり立てて、差額と種々な利便性へなけなしの老後生活資金さえ吐き出させようという豪華？　病院戦術で、医療危機を打開しようとしている支配層の戦略へ南生協が取り込まれているのである。
これは何よりも貧困層の切捨て医療であるが、財源なしで次々病院に課せられてくるさまざまな対処事項は、疲弊した医療従業者に、ますます過労を強いることになり、医療全体を少し長期に見れば一途に地域医療は崩壊へ向かうだろう。
病院の現場では、矛盾に満ちた仕事は、医師→看護師→事務員へと転化されてゆく。梅村さんの「一人で地域医療連携室の仕事」などはその典型で、とくに南生協の長年の医師会との感心出来ない関係を知る私は、梅村さんの労苦には心痛むものを覚える。
まともな医療を守るためには、医療に携わる人たちの健康と命が守られねばならない。

（たけなか・しずお　名古屋市緑区在住　86歳）

＊　筆名　凧（いかのぼり）青二

●編集後記

ＮＨＫニュースによると福島原発事故現場では、今も毎日三千人の人たちが作業を続けていて、何ら解決していないのに、国は大飯原発を再稼動してしまった。大勢の抗議を無視して■でも再稼動は許せないと思う人たちは広がるばかり。東京の二十万、十七万人という驚くような人数の集会を受けて全国あちこちに「原発いらない」の一点に同意する人々の波は大きくなっていく■若い人、子ども連れの人たちと、いろんな鳴り物の中で声を出していると、力がもらえる。連帯というものでしょうね■やっとマスコミも報道するようになったが、この声を日本中に響かせて原発に頼らないエネルギーを選ぶ国にしたいと思う。

（Ｋ・Ｎ）

あいち年金者大学は、２００３年４月、文化誌『季刊ひやくさい』を創刊した。創刊号の編集後記には「すべてはゼロから、お金は一円もないという。（中略）『三号雑誌』と言う言葉があるが、そんなおそれも抱えての誕生である。しかし、世に出た生命はどんな未熟児であれ、強く逞しく育てる努力をしなければならない」と書かれていた■しかし、多くの執筆者と読者のみなさんに支えられて次号で40号を迎えることになった■創刊号の編集長は一ノ瀬正巳（敬称略、以下同じ）、編集委員・浅井薫、鬼頭康男、玉置雅子、道原始、吉岡弘晴■4号と5号だけ幅伸子、6号からは大長芳雄、藤嶋九一が加わった■9号で玉置雅子が辞め、23号から中澤香保子が加わり、23号で道原始が辞めた■27号から編集長が鬼頭康男に替わり、29号から浅井薫が病気療養のため休養、40号を以て吉岡弘晴が辞めることになった■この間、玉置雅子と道原始が亡くなった。心よりご冥福をお祈りします■さらに50号の嶺を目指して発行を継続してほしいものである。

（Ｈ・Ｙ）

あいち年金者大学・文化誌
季刊・ひやくさい
第39号（２０１２年10月）

□編集・発行人　鬼頭康男
□発行所　あいち年金者大学
〒460-0007　名古屋市中区新栄
2-53-19小島ビル２階
全日本年金者組合愛知県本部内
☎０５２-２３８-２６８０
Fax０５２-２３８-２６８１
□編集委員　浅井　薫　一ノ瀬正巳
大長芳雄　中澤香保子
藤嶋九一　吉岡弘晴
□印刷所　アーク印刷㈱
〒462-0037　名古屋市北区志賀町1-98
☎０５２-９１５-９６６９
Fax０５２-９１５-９７７０
□頒価　三〇〇円